

(14:00開始)

○阿部部会長　これより第3回「フロンティア分科会幸福のフロンティア部会」を開会いたします。よろしくお願いいたします。

今日は古川大臣に御出席いただく予定でございますけれども、ちょっと遅れられていらっしゃるということで、先に議事の方は進行させていただきたいと思っております。到着なされたときに、どなたかの委員が発表なさっていると思っておりますが、その発表の合間にごあいさついただくという形をとらせていただきます。

それでは、まず一番最初に資料の確認をいたします。

資料1-1と資料1-2に永田委員の提出資料がございます。

資料2で古市委員の提出資料をお配りしております。

それでは、これから前回のときと同じように各委員の御報告に進みたいと思っております。以前、10分というのが非常に短いという御指摘をいただきましたので、最大15分までというお時間をいただいております。ただ、そこを過ぎますと事務局側から紙が差し出されますので、私の方からもうやめてくださいということはいませんが、その紙が出されましたら速やかにお話を終了させていただければと思います。

その分、後ほど長い時間、議論の時間をとっておりますので、そこで言い残したことがあれば思う存分言っていただくという形にさせていただきたいと思っております。

今回は永田委員、新田委員、福島智委員、古市委員に御発表いただきます。

次回に國光委員と野口委員に御発表いただきたいと思います。

それでは、早速ですけれども、まず永田委員から御報告をお願いしたいんですが、よろしいでしょうか。よろしくお願いいたします。

○永田委員　永田でございます。始めさせていただきます。

幕末の日本といいますと、外国人から見るととても教育の進んだ国民であるとか、悲惨な人がいないとか、法律が確実に遂行されているとか、みんなが幸せな顔をしている、そういう見方が文献に散見されます。

一方では、史実として飢饉や年貢の収奪による暴動など、いろいろな問題点もありました。限られた短期間の日本滞在では仕方のないことですが、当時の外国の方は日本の一面しか見られていなかったのではないかと推測されます。

しかし、実態として、当時の日本人には自然の恵みを楽しんで、自然の脅威を甘受する精神性が色濃く見受けられます。3,000万人の人が自給自足をして、民衆の自治が確立していました。そして再生エネルギーを使うという「エコ・スローライフ・リターナブルで文化的な社会」が構築されていたというのも事実です。

ここで私が駐日名誉領事を拝命しておりますブータン王国の御紹介をしていきますと、ブータンでは生活の智慧といいますか、育児とか料理とか、日常生活に目指した伝統文化が長く継代されてきております。子どもを育てることに不安を女性は感じておらず、3世代、4世代の大家族で皆が子育てを支援しています。当然、年老いたら大家族みんなで面

倒を見るわけですから、孤独死なんてあり得ないということです。

こういうブータンと比較して日本は戦後、驚異的に経済が発展して国も国民も収入が増大していきました。そこで国民が物を購入して、消費が増大して、経済はどんどん繁栄しました。しかし、そのプロセスにおいて文化とか伝統とか精神性とか、日本人として本当に大事にすべきものを失ってしまったのではないか、同時に資源の枯渇とか環境破壊の原因をつくってしまったのではないか、とも考えられます。そこで日本の将来の幸福像を考えるに当たり、過去と未来、物と心、心と身体、開発と自然、個人と社会などなど、さまざまな要素のバランスをとる必要があるのではないかと、私はそう感じております。

現実を見ますと、ここにキーワードを幾つか書いてみました。少子高齢化の加速と孤独死の増加、無縁社会と限界集落、結婚できない若者の増加、就職できない大卒者の増加、産業の国際競争力の低下、隣国の経済力増大による脅威、こういうものが考えられます。

そこで、ないものねだりをしないで、あるものを磨いて活かしていく方向性、温故知新といえますか、イノヴェーティブな日本の再生を考えてみました。

仏教（密教）の教えに身・口・意というものがあります。すなわち行動、言葉、こころという三本柱。今回は、安心・健康で持続性のある社会づくり、人材育成を通じた国際競争力の回復、こころの故郷である家族の絆の構築。（イノヴェーティブな日本の再生という観点から）この3つの柱を考えてみました。

幸福を5つの側面でもとらえてみますと「1. 仕事の幸福」として生き甲斐、働き甲斐、自己成長、女性の社会進出、障害者の社会進出などがあります。

「2. 人間関係の幸福」として世代の連携、団らん・癒し、各種差別の解消、こういうものが考えられます。

「3. 経済的幸福」では貧困のない社会、再生可能エネルギーを使う、サステナビリティが大事です。

「4. 身体的な幸福」では医療の充実、予防医学、食の安全、心のケアが重要。

「5. コミュニティの幸福」として自然環境保全、地域活性化、大災害への備え、伝統文化の伝承。こういうものが考えられると思います。

それぞれを集約しまして、幸福な社会というのは基本的には不安とか不満とか不公正の少ない社会であると定義いたしました。

5つの切り口から考えますと、

1 番目の仕事の幸福は、生涯現役でいられる社会を目指すべきでしょう。

2 番目は、人間関係の幸福は大きな家族を中心とした地域社会の構築。

3 番目は、経済的な幸福は、自分のためだけでなく、他人（社会）のための金銭消費性向。

4 番目は、身体的な幸福は、天寿を全うできる医療環境の整備。特に三大疾病の死亡減。

5 番目のコミュニティの幸福は、安心して楽しく住める地域。こういうものを目指すべきであろうと考えます。

これを集約し、3つの戦略を考えました。

1 番目が笑顔と安らぎと活力のある国。

2 番目が世界から尊敬される国。

3 番目が優しい時間が永遠に流れるアジアの桃源郷。

それぞれの戦略を具現化していくと、

1 番目は社会的弱者保護システムを根本的に改革するための拡大家族ネットワークシステム戦略。

2 番目が、国際的な視野を持ち、多様な価値観の共存を受容・包摂できる社会性を確立するための徳育強化戦略。

3 番目が、地方の活性化を進め、暮らしやすい地域をつくるため特区を設けて、サステナブルエリア戦略を策定する。

1 番目の拡大家族ネットワークシステムは、そもそも少子高齢化で人口が減少しており、その結果、限界集落とか無縁社会というものができたわけです。ただ、過去の歴史から考えて、政府による社会保障制度というのは人為的につくった制度であり、持続性という観点からは多少なりとも無理・困難がつきものでしょう。最も自然な形は家族を中心とした社会保障システムと考えられ、これを拡大家族ネットワークシステムと言い、ブータンでは Extended Family Network System (EFNS) と言いますけれども、これによって地域の弱者を地域全体で面倒を見る仕組み、こういうものがナチュラルなのではなかろうか、大きければ大きいほど家族の絆は強くなって長続きするのではないだろうか、という実現可能性の高い方向性を見出せます。

具体的な戦術としましては、まず個人の欲求のコントロールが重要になりますが、そのためには幼少時からの徳育も必要でしょう。また、家族と時間を過ごすために遠距離交信システムを構築して、家でも仕事ができる、出先でも仕事ができる、そういう家族の絆を強くする機会を社会全体で構築していく必要があると考えています。家族の絆の強さと、国家の絆の強さは比例するものだと思います。これらを実現するにはいろいろな法整備が必要です。

2 番目の徳育強化戦略は、現代は自分さえよければ人のことはどうでもいいとか、欧米流の自己主張が今の風潮なのですが、反面、国際化に自らを投げようとする人材の絶対数が不足している、これも現実であります。厳しく言えば、今の日本における教育システムというものは既に疲弊し、陳腐化していると考えます。緊急的に改革する必要があると思います。

その1つの戦術として、小さな子どもの頃から国際教育の体制を整えていく必要があります。時間がかかることですが、本部会の使命は2050年の日本の幸福像の構築を目指すわけなので、2050年に社会の中核となるような人たちに対して徳育教育、国際教育というものを施して、愛国心をもって国際社会で活躍できる人材を輩出できるような教育機関を助成していく必要があります。

競争原理が強く働く現在の大学の受験システムがあるから、通過点となる高校受験、中学受験がエスカレートしていくわけなので、こういう大学入試センター試験なども再検討して、大学の自由裁量を広く認め、地域に根差した大学づくりを行い、世界から尊敬される日本人として国際化に対応できる人材育成を実践できる体制作りが不可欠です。

国際化に対応できる教員養成の在り方も再検討しなければなりませんし、今、学校で担任制が一般的になっていますけれども、担任というのは置いてもいいのですが、負担が大きいですので組織的、あるいはチームワーク・グループワーク的に対応できる体制を構築していく、そうした枠組みを考えました。

3番目、最後の戦略としてサステナブルエリアの設置ですが、日本の地方は若者が住み続ける魅力が少ないのです。物価は高いけれども、便利だから都会に行く、所得や労働環境が原因で結婚はなかなかできない、子どもも増えないという人口動態における負のスパイラルが見られるのが日本の現状です。ですから、地方に文化的に整備された暮らしやすい街をつくって、そのエリアを増やしていくのがいいのではなかろうかと思いました。

具体的には国内で10箇所ぐらいの地方にサステナブルエリアという特区をつくって、小さな桃源郷をつくります。それを少しずつ増やして行って、日本中に小さな桃源郷がたくさんできれば、やがて日本全土がアジアの桃源郷となり得ます。そのためには地域の絆を強める組織づくりにも注力しなければなりません。鹿児島県には、薩摩藩時代から郷中教育というものがあるのですが、こういう街ぐるみ、共同体ぐるみの人間育成制度も参考になるでしょう。都会から地方に移る家族の支援をしたりするのも大事だと思います。

拡大家族について追加資料ですが、実は私の会社に4世代で住んでいる東京在勤の社員がおりまして、彼は恥ずかしいから余り他言しなかったと言っておりますが、実際に話を聞いてみると非常に幸せに暮らしているということで、こういう実例が日本各地に結構あるのではないかと思います。

こういう拡大世代、4世代家族、3世代家族をつくることによって、幸せな日本を構築していければいいのではないかと考えました。

以上です。説明時間は11分でした。

○阿部部会長 ありがとうございます。本当に11分でまとめてくださって感謝いたします。

それでは、古川大臣が御到着になりましたので、ごあいさつをいただきたいと思います。よろしくをお願いします。

○古川国家戦略担当大臣 遅くなりまして済みません。国家戦略担当大臣の古川でございます。

フロンティア分科会の幸福のフロンティア部会の皆様方には、委員に御就任をいただき、また、お忙しい中お集まりをいただきましてありがとうございます。

入ってきて、第一印象は女性が多い、また、若い人が多いなと感じました。この永田町にいますと若いというと、私は46歳なんですけれども、私でも若いと言われるのですが、

巷で言えばしっかり私の歳はおじさんの歳であります、そういう意味で将来のことを議論していただくには、やはり若い皆さんに議論をしていただくのは大変いいことだと思います。

幸福というのは非常に難しい話で、総理のどじょう演説で有名になった相田みつをさんが、幸せはいつも自分の心が決めるという話がありまして、ですからある意味主観的なものであります、ではどういうときに幸せを感じるのか。これはその気になればいろんな幸せを感じられるところがあると思うんですけれども、1つには居場所と出番がある社会というのが幸福、幸せを感じられる社会ではないか。

政権交代以来、ずっと我々が目指している社会というのは居場所と出番のある、すべての人が自分自身どこかに社会の中あるいは家庭の中でもそうだと思いますけれども、居場所があつて出番があれば、そのことに充実感や満たされた気持ちになれるんだと思います。ですから、そういう社会をつくっていきたいと思っております。

ここの部会で議論していただく話は、最終的にはフロンティア分科会としてまとめていただいて、それは年央にもとりまとめる国家戦略会議の日本再生戦略にも、活かさせていただきたいと思っております。

大変難しい課題ではございますけれども、ここでの議論がすべての人、日本人は勿論ですが、世界の人に対しても幸せというものを考えるいいきっかけになっていただくような、そういう機会になればと思いますので、闊達な御意見をいただきますように、よろしくお願いいたします。

○阿部部会長 ありがとうございます。

それでは、続きまして新田委員からの御報告をお願いしたいんですけれども、よろしいでしょうか。よろしくお願いいたします。

○新田委員 平田牧場の新田です。よろしくお願いいたします。

皆様の発表と同様に、私も家族が幸福にとっては極めて大事だろうと思っております、まとめたものを読むという形で、15分以内を目指して読み上げたいと思います。途中で3分ほどのビデオが入りますので、よろしくお願いいたします。

私の家族は妻と、とっくに成人した26歳の娘、23歳の息子、2人の子どもがいます。親として子どもの将来、まだ見ぬ孫の未来に責任を持ちたいと考えております。

幸福な社会を考えた場合、もはや日本だけの幸福は存在しないと考えます。世界を見てもいまだに戦争、混乱が続き、悲惨な映像が流れています。人口は今や70億人を突破し、飢餓人口が10億人に近いと言われております。今後の世界は人口が増えるほど奪い合うという悲惨な社会が予想されます。

これからの社会は世界中の国を、世界国家1つだけにして各国が1つの地域となり、豊かな地域が貧しい地域を支え、地域の生活文化を尊重し、守っていく。そんな世界の創造が必要です。世界にテロ、戦争がない、飢餓、貧困がない、奪い合いがない、環境破壊がない、為替摩擦などの無意味な競争がない、そんな平和で幸福な世界国家の創造が必要で

あるというのが、幸福の未来図です。そのような世界国家を想像するリーダーシップが日本であってほしいと考えます。

そこで私の発表ですが、世界の中で高齢化や人口減少が最も顕著な日本、限界集落が加速度的に増えている日本の地方社会で、地域社会、地域文化を守る意味から社会で最も小さなコミュニティである家族を幸福モデルといたしました。

世界中のすべての家族の幸福に貢献することが日本の役割であり、幸福のフロンティア部会の提言であるべきだと考えます。

幸福の1つの形として、1例御紹介いたします。

弊社には3年前に酒田に家族で移り住んできた、横浜出身の38歳の広報課長がいます。家族は1つ年下の美人の奥さんと、元気でかわいい小学1年生の息子さんの3人家族です。

この度の幸福部会のお話を社内でディスカッションする中で「所得は少なくなったが、幸福度・生活満足度はむしろ上がった」と本人から話がありました。

理由は仕事と家庭のライフ・ワークバランスがよいとのこと。

職場が近いので子どもを学校に送り出してから、徒歩での通勤、日々の仕事の充実、終業後には家族でそろって夕食、家族で過ごす豊富な時間、地域とのコミュニケーションなど。「都会の友人がうらやましがります。」とうれしい言葉。

そして、もうひとつ大きな理由としてあげたのが毎日の「食」の充実。毎日の豊かな「食」が豊かな生活をつくっているといます。豊かな食とは「豪華な御馳走」という意味ではなく、地方都市ならどこでもある、その土地の食べ物と旬のある豊かな食生活であり、食材の素材本来の持つおいしさです。

地方には「幸福」の最も基本的な部分であるライフ・ワークバランスがとれた「人間らしいゆとりのある生活」そして「季節感のある豊かな食」があるのです。

おいしいと感じることは、幸せを最も感じる瞬間のひとつです。

毎日の「おいしい食事」は幸福度向上への大きな要素と言えます。

地方には「幸福」の種が沢山あります。東京への一極集中から地方へとバランスの良い国づくりへ、しっかりと舵を切るときです。

キャッチコピーは幸福の国ニッポン。助け合い、支え合う国ニッポン。思いやりの国ニッポン。良い食・健康ニッポン。

日本は明治維新以来の大変革が必要な時代に突入いたしました。

日本の成長には、これまで培ってきた高い技術力、モノづくり力を最大限活用していかなければなりません。地方にも世界に貢献できる技術力、デザイン力、想像力を秘めた企業が沢山あると思います。日本社会の幸福はどうあるべきかを国民全体で考え、よりよい社会の実現のために強いリーダーシップで実行するときです。

幸福の条件は多々あるものの、その中で大きなウェイトを占めているのは「健康」ではないでしょうか。明日の健康な心と体をつくるのは毎日の「食」です。健康に良い豊かな

食がある限り、将来にわたって幸福な姿を思い描くことができます。

毒入り餃子事件など「食」の安全・安心が問われています。食品の裏側に貼ってある「一括表示ラベル」を見ても原材料の中身がよくわかりません。現在の延長線に存在する未来の食は、食品添加物が今以上に蔓延することが予想されます。人の味覚は「幼少期に食べるもので決まる」と言われています。化学調味料などの過剰摂取により味覚が退化し、素材本来が持つ繊細な味が分からない人が増えることは、子どもにとって大切な食育や食文化を減退させる原因となる可能性があります。

医学の父、古代ギリシャのヒポクラテスは「食べ物が一番の薬である」と言っており、食を健全にすることで、医療費の削減といった一石二鳥の効果も期待できるはずです。「ただ空腹を満たす食」ではなく、「明日の健康をつくるゆたかな食」への舵取りが幸福を考える上で大変重要ではないでしょうか。

化学調味料や不要な添加物に頼らない栄養バランスにも優れた世界に冠たる理想的な日本の「食文化」の復権。その素晴らしい食生活、毎日の食生活がもたらす健康、そして幸福。

「さあみんなで『良い食』をはじめよう！」

豊かな食文化・食生活がもたらす幸福な食卓こそ、2050年の幸福の姿であると信じています。

ここで3分、ビデオをお願いします。

(ビデオ上映)

○新田委員 今のが「良い食」のプロモーションビデオで、最初に出た熊谷先生は酒田の子どもの虫歯の率を世界一低くした有名な歯医者さんで、予防歯科のパイオニアです。

次にいきます。2025年に向けていかなる領域を切り開いていくかということで、1はまず食育です。幼少期に食べるもので人の味覚は決まると言われています。素材本来の持つ繊細なおいしさを幼少期から訓練することで子供の味覚を育てます。食育を通して日本が世界に誇る食文化を守り続けることが必要です。

2. 良い食、スローフード

スローフード運動は、今や世界中に広がっています。スローフードの理念は3つ。「おいしい」正しくおいしいこと。食文化を守ること。「きれい」環境に良い、素材が良いこと。「ただししい」生産者に対して公正な評価をおこなうこと。

発祥の地であるイタリア、ピエモンテ州のブラでは単なる「食」を楽しむといったレベルから大きく発展し、その考え方は市政、医療分野、専門大学の設立等、毎日の食から社会を見直す運動へと進んでいます。先進事例として大いに学ぶ点があると思います。

その次は今、言いましたように3は口腔の健康です。健康の基本は口腔の健康でありまして、その先生も常に言っていることは禁煙なんですけれども、たばこが悪い。あとは口腔のメンテナンスをしっかりとやる。そうすると80歳までしっかり自分の口で咀嚼できますよということを、一生懸命啓蒙しております。

4番は食料自給です。

日本は古来お米の国ですが、現在、全国で約100万ha、実に3枚に1枚が減反田であり、転作や耕作放棄地となっています。弊社は食料自給活動のパイオニアとして長年取り組んでおり、小泉内閣時には特区をとり、生活クラブ生協、弊社、地元遊佐町、米生産農家、消費者、飼料会社などが、全国に先駆けて飼料用米に取り組み成果をあげてきました。2011年の作付は1,200ha、収量は6,600tにも及び、その取組規模は全国一を誇ります。

耕作放棄地の有効活用は、食料自給率向上のみならず、環境保全、資源循環、豊かな国土の継承、雇用の創造、地域特産品づくり、食糧安全保障など、多くの意義があり積極的に取り組むべき課題であります。

日本が「幸福のフロンティア」を切り拓き、理想の姿を実現する上での障壁とは何か。

食が乏しい時代「うま味」を増す調味料として、どの家庭にも食卓に化学調味料の小瓶がありました。その後、化学調味料はチャイニーズシンドローム問題などの紆余曲折を経て食卓からは消えましたが、現在も口にしない日はないと言っても過言ではありません。

化学調味料は一括表示ラベルに「調味料（アミノ酸）」と表示してありますが、消費者にはほとんど知らされておられません。また、同様に外食ではお店の食材が何を使用しているのか全く知らされていないのが現実です。食の大国、日本は世界に誇る豊かな食文化があります。食の情報公開を徹底し、健康に寄与する「よい食」を構築すべきです。

毎日の食は「明日の健康な心と体をつくる」大切なもの。食品メーカーにはこう問いたい「自分の作った食べ物を子供や家族に胸をはって食べさせることができますか？」と。

又、化学調味料は使用制限も無いため、どの程度使用されているか判断することすらできません。

国民の健康増進、国産食材の消費活動のために、消費者庁には特段の奮起を要望したい。

日本が幸福のフロンティアを切り拓き、理想の姿を実現していくに際して、どのような基本的原則に立脚すべきか。

健康に害のあるものを排除し、より良い食の環境をつくる。

まず1つは禁煙です。禁煙は万病のもと。もはや個人の嗜好品といったレベルの話ではありません。たばこは口腔の健康を阻害し、がんを始めほとんどの病気に関係すると言われています。副流煙により周りの人にも健康被害を与えます。たばこは即刻なくすべきだと思います。

国民の健康増進、世界に誇る豊かな食文化を守るため「良い食」を追求する！

良い食のこだわり。「食」とはこうあるべきだ！という7つのこだわりを軸に食環境を創造する。7つはおいしいこと。無添加であること。化学調味料を使用しないこと。国産の良い素材を使うこと。子供の味覚を育てること。環境にやさしく育てた食材を使用すること。食文化を守ること。

ただちに日本型スローフード、食育の実施、食品添加物表示についての国民的議論の開始。食品品質表示などについての再検討、国民目線の消費者庁の役割確認。

5年以内に表示法の見直し。たばこに習い「この食品には化学調味料が使用されています。」「合成保存料が使用されています。」などのメッセージ表記。添加物の必要性の徹底的議論。日本の食文化の素晴らしさを徹底的に掘り起こす活動。

10年以内にスローフードに匹敵する日本の食ブランド「良い食」の確立。

幸福はもっとも重要なテーマであると考えます。「繁栄」「幸福」「叡智」「平和」のどれもが幸福に直結していると考えます。幸福を実感しやすい社会のために従来の「顧客満足度」「従業員満足度」といった価値尺度から、今後は「顧客幸福度」「従業員幸福度」として導入検討をするべき時期であると考えます。

地方企業として地域の雇用の創出、子育て支援の充実、ワーク・ライフ・バランスが取れた豊かな食、ゆとりある生活をしっかりサポートして参ります。

豚は世界中で幸福のシンボルとされています。

おいしい豚肉を通じて社会へ貢献し、幸福な日本の一助となれば幸いです。

「食べることは幸せを噛みしめる行為です」。

最後に、福島智先生より頂戴したコピーをご披露させていただきます。

「日本の未来は、豚にまかせよ！」

先生、どうもありがとうございました。

○阿部部会長 大変おいしそうなプレゼンテーションありがとうございました。

次は福島委員、よろしいでしょうか。よろしくお願いいたします。

○福島委員 私はプロジェクターを使いませんので、この場所で発表させていただきます。

新田委員から豚のメッセージが出て、豚には勝てないなという感じですがけれども、本当に平田牧場の豚はおいしいです。私もちょっといただきましたが、味噌漬けとか生ハムもおいしいです。

新田委員が人間にとっての食べるということの大事さ、食の安全ということに象徴されるさまざまな生活の豊かさについておっしゃったと思いますが、私のメッセージはコミュニケーションです。人と人とのコミュニケーションというものが大事ではないか、言わば本能に関わるような、あるいは水や酸素と同じぐらい大事なものではないか、というのが私のメッセージです。

言ってしまうと一言に尽きるんですけども、ちょっと資料の説明をさせていただきますが、まず皆さんに私の本を1冊、少しかたくてぶ厚い本ですが、お届けして、更に今日も2冊お届けしているんですけども、これはなぜかと言いますと、なかなか普通の本屋では多分手に入らないであろう。絶版ではないんですが、ほとんど売れておりませんので入手が難しいだろうと思いますので、参考までにお配りしてございます。今日のものはエッセイとか新聞記者が書いたルポルタージュみたいなのなので、前回のものよりは読みやすいと思います。

改めて自己紹介させていただきますが、私は49歳で目と耳の両方に障害を持っています。今、東京大学先端科学技術研究センターという、名前はすごく理科系、工学系っぽい

んですが、実は理科系も文科系もごちゃ混ぜになっているユニークなところにおります。

私はそこでバリアフリー分野の担当教授をしているんですが、目と耳の両方に障害がある、要するにヘレン・ケラーさんと同じような、これは盲ろう者と言うんですけれども、余り知られていないんです。ヘレン・ケラーさんはだれでも知っているが、日本にも同じような重複障害者が2万人ぐらいいるということが余り知られていなくて、たまたま私はいろいろ条件に恵まれて、日本で初めて大学に盲ろう者として入ったということもあって、その後、約30年盲ろうの状態ですべて生きております。

今こうやってしゃべっているのも自分の声が聞こえなくて、ではなぜしゃべっているのかと言うと記憶です。以前しゃべっていたときの記憶で話せるということです。

今日は私自身の経験をお話しようと思っておりますが、小さいときは普通に目で見えて聞こえていたんです。9歳のときに目が見えなくなって、18歳で聞こえなくなったという経過をたどっております。

よく尋ねられることの1つに、もし今、少しの間でも見えるようになったら何を見たいですかと言われていたりすることがあるんです。例えばお母さんの顔ですかとか、奥様の顔ですかとか、ちなみに私の横にいるのは妻であります。妻であり同時に通訳者も兼ねているのですが、とにかく奥様の顔ですかみたいなことを言われるんですけれども、私はいずれも違いますと答えています。

おふくろは兵庫県の実家で健在ですけれども、今からおふくろの顔を見たいとも思わないし、それに私は妻の外見を見て結婚したわけではありませぬので、今さら下手に顔を見て「うわっ」と思うと大変かなと思っておりますので、よく言えば内面で結婚したということです。

私の見たいものは何かと言うと、地球なんです。地球を見たい。子どものときから宇宙に関心があったので、例えば月面から見た地球の映像とか、軌道上から見たような青い地球の映像はもう一度見たいなと思っております。

失明する少し前に天体望遠鏡を買ってもらおうという約束になっていて、それが果たせなかったことが唯一残念なことで、だけれども、見えなくなってからは割とすぐ順応していったんです。ところが、18歳のときに聞こえなくなって、これは非常に楽天的な私なんです、そのときはまいりまして、何がまいったかと言うと、見えなくて聞こえないから例えば景色が見えないとか、音楽が聞こえないというのではなくて、コミュニケーションができなくなった。非常にしにくくなったということなんです。私からはしゃべれるんですが、相手の言葉が聞こえない。

既に点字の読み書きはできたんです。だから点字の本は読めるし、手紙などは書ける。だけれども、幾ら本を読んで、幾ら手紙を書いたりしても、そういう文字情報だけでは心は癒されないんです。その場でコミュニケーションするということができなくて、最初は仕方がないので私が声でしゃべって、例えば母親はたまたま点字はできたから、点字を書くために一番簡単な道具はこういうものなんですけれども、針で穴を開けていくんです。例え

ば「あいうえお」と書いたら、こういうふうに出っ張るんです。例えばおふくろがこれで「お風呂がわいたよ」というふうを書いて私に渡す。私はこれを見て「風呂がわいたんか。それじゃ入ってくるか」というふうに声で答えるという、そういうまどろっこしいことをやっていたんです。

だけれども、おふくろはまだ点字を知っていたからよかったです。あるときに親父とおふくろが法事に行って、兄貴と2人だけで留守番することになったんです。それが今から31年前の2月22日でまだ覚えています。どうするか。私と兄貴だけになってどうやってコミュニケーションするのかということになって、仕方がないので普通の文字と点字と一緒に書いたようなカードをつくったんです。これは現物です。たまたま残っていて、例えば「腹減ったか」とか「ご飯ができたよ」とか、私は当時高校生でしたけれども、なぜか「ビールでも飲めか」というメッセージがあったり「もうそろそろ酒はやめたらどうや」とか、幾つかのメッセージをあらかじめ兄貴が考えて書いて、母親が点字を書いて、そういうメッセージをつくっていたんです。

だからそれで最低限のやりとりはできたんですが、非常に遅いし断片的で、もう少し早く打てる方法はないかと思って、タイプライターを使うということを考えてんです。これは点字を書くためのタイプライターなんですけれども、先ほどは手で書きました。そういう手で書いたものとは違って、こういうタイプライターだと6つのキーを使って書ける。早く打てる。紙を外してやはり同じように読める。

このタイプライターでメッセージを書くという方法で最初はやっていたんですが、ただしこれはうるさいし、持ち歩けないわけです。それがあるとき、母親がタイプライターのイメージを使って、指にタッチするという方法を考えたんです。ここに6つのキーがあるでしょう。この6つのキーを打つ代わりに私の指にタッチする。こういうふうには6つのキーの代わりに指をキーに見立ててタッチする。

おふくろは私に「さとし」と打ったんです。「わかるか」と打ったんです。要するにタイプライターのキーの代わりに指をタッチしたら、たまたま読めたんです。読めたんですが、私はそのときは母親とけんかしていたんです。耳も聞こえないし、いらいらするし、病院に早く行こうとぶちぶち文句を言っていたので、母は多分腹が立っていたのではないかと思うんですけれども、でも今、聞いてみると神様のお告げがあったような気がするとか、そういうことを母親は言うんですが、それは嘘やないかなと私は思っていて、憎らしい息子への腹立ち紛れのエネルギーではないかと思っています。

そのときは私はそんなに嬉しくはなかったんです。母親と話ができるようになって、高校生ぐらいの息子というのはそんなに喜ばないわけです。「なんでこんなおぼはんとばかり話さなあかんねん」みたいな感じのところは私にはあったので。ところが、今の方法でいろんな人と話ができることがわかって、ばっと私の世界が広がっていったんです。

今、14分ですね。あと1分でもう一つのメッセージを言います。

では具体的にどうするのか。コミュニケーションを豊かにするにはどうするか。これは

先ほど永田委員がおっしゃっていた教育の改革だと思うんですが、私は東大に来る前に金沢大学の教育学部で教員養成系の課程で助教授をやっていたんです。そこで驚いたのは、教員養成のカリキュラムの中にゼミ、ディスカッションをする授業というのはほとんどないんです。3年生までは一方的な講義ばかりで、こういうものではディスカッションとか対話をできる子どもを育てられない、そういう教師ばかりが養成される。だからまずは教員養成のカリキュラムから変えることが大事かなと思っています。

済みません、15分を20秒ぐらい過ぎました。以上です。

○阿部部会長 時間どおりにおさめていただきありがとうございます。

最後に、古市先生からお願いいたします。

○古市委員 東京大学大学院の古市と申します。

福島さんに29分しゃべっていただいて、私は1分でもよかったんですけれども、本当に申し訳ないんですが、発表させていただきます。

多分、私は今日ここに若いというだけで主に呼ばれていると思うので、若者目線で今の2012年と2050年のことを発表したいと思います。

まず2012年の今の日本がどういう状況になっているかということ、ざっくりまとめてみたんですけれども、野田首相がちょっと前の会見で「若者はついていない世代」ということをおっしゃっていました。でも、それとは反するデータがあって、20代の生活満足度は大体7割以上で、実は多くの若者は現在の生活に満足していると答えています。これは勿論、若者が幸せでよかったねという話とはちょっと違うんですけれども、ただ、今、実は日本というものは日本史上最も豊かな時代とも言えると思います。

どういうことかと申しますと、まず家族福祉というものがある。大体今の20代、若者世代の両親世代はちょうど50代、60代で、日本の中で相対的にストックを持っている世代です。かつ、整備されたインフラもある、治安もいい、デフレが進んでいることによってファストフード、ファストファッションなど、消費者としては日本という国はある意味天国と言えると思います。ただし、勿論これでよかったねという話では当然ありません。

さまざまな重圧がこれから若年層にも押しかかってきます。これは若者に限らず、当然日本の問題です。まず世代間格差。租税と社会保障料の世代間格差が1億円を超えるという試算もあります。あとは不安定な労働環境。特に過去20年間でブルーカラー系の職業が減少していくことによって、特に高卒の若者の雇用がよくない状況になっています。そして少子化です。70年代から「高齢化」、90年代から「少子化」というものは繰り返し国会などでも問題とされてきましたけれども、本格的な対応がなされず、ここまで来てしまいました。

ここで気づくのは、幸福だけというものだけを考えて政策を考えることのある種の危険性です。幸福度というのは人は身近な集団との比較によって幸福度をはかるということが、さまざまな研究で明らかになっています。すなわち、日本全体がどうなってしまうのが、実は身近な集団と自分の差が余りなければ、幸福度はもしかしたらすごく下がらないかも

しれない。そういう状況が起こるかもしれないと思っています。

2050年のある種のシミュレーションなんですけれども、一見幸せそうです。2050年もこのまま日本が進んだら、階級社会化は今よりも進むでしょう。階級社会が更に進んだ日本というものは、ある種、幸せな社会になると思います。すなわち、将来へのあきらめによって階級上昇の夢が断たれ、こんなものだろうとあきらめることによって、人々の幸福度はもしかしたら今よりも上昇するかもしれません。

その時代は恐らく多分新しい富裕層は、多分高層マンションならば事実上のゲーティッドコミュニティ化して、そこの中で世界中を飛び回るでしょう。そのころにはちょうど日本の人口も多分1億人を割ったところで、出生率も1前後をさまよっているでしょうから、ちょうど現在のシンガポールを真似して富裕層中心の移民を何とか受け入れようとして国力を保っているかもしれない。また、そのころの新中間層と呼ばれる人は、特に玄田先生も1回目でおっしゃっていましたが、優秀な若者ほど海外へ出ていくことが予想されます。その当時ムンバイであるとか、どこが世界の中心都市になっているかわかりませんが、どんどん海外に出ていくでしょう。

同時にインフラ維持のため都市に人口が集中しているようになっていくと思います。一方で新しい貧困層の人々は、例えば最低賃金が撤廃されたとしても例えばベーシックインカムなどの形で一定の収入が保障されてしまったら、そこまで治安が悪くならないことも予想されます。そのころにはネットワークゲームとか翻訳技術が発達しているでしょうから、そこそこの楽しみ的手段はたくさん広がっているでしょう。というわけで、そこまでそれが主観的に見たら不幸な社会ではないかもしれないというのが、2050年のある種の私の予想です。ただし、勿論これはこんなものが理想的な姿ではありません。そのために何をすべきかということを経つか述べたいと思います。ただし、それは別にトリッキーなアイデアがあるわけではなくて、物すごく基本的で物すごくベーシックなことです。

1つは少子化対策です。今、日本の合計特殊出生率は大体1.4前後。こういう社会は日本とドイツと韓国ぐらいで、これほど急激に人口減少が進んでいくという社会は前代未聞です。大体北ヨーロッパのように1.8、1.9前後で人口が徐々に減っていくならまだしも、1.4もしくは1.3前後で減っていくというのは社会が余りにも急激に、ラディカルに変わり過ぎます。

特に日本の人口の中で2番目にボリュームが多い団塊ジュニアの出産可能年齢が大体5年前後で終わります。それがある種1つの最後のチャンスかもしれません。半分はもう遅いんですけども、そこの中で何が大事かというと、1つは女性が働きやすい環境の整備です。デンマークの社会学者エスピン＝アンデルセンという方が、女性の役割の変化こそが社会に革命をもたらすものだと言っています。どういうことかと申しますと、女性が働きやすくて、かつ、子どもを産みやすい環境を整えれば、少子化がある程度は解消される。少子化が解消されれば世代間格差のバランスもある程度は解消される。同時に納税者も増える。現在、日本の納税者の数は5,000万人以下ですけれども、働く女性も納税すること

によって納税者も増える。女性の生涯所得、世帯所得が増加すれば課税基盤が安定する。

更に、女性が働けば働く女性向けの新規産業、雇用も創出されるというわけで、逆にヨーロッパの国々を見てもある程度人口減少、高齢化が進む社会ではこれしか解決策がないのだろうけれども、いまだに日本はこの少子化対策に本気になっているようにはとても思えません。まず非常に当たり前のことですが、この少子化対策に本気になるということがまず第一点目。

第二点目として、社会的弱者に対するエンパワーメント。特に若者目線で1つ言わせていただくと、若者を使ったからと言って、若者を登用したからと言って問題が解決するわけではありません。わけではありませんけれども、若者を登用する方がいい分野やいい業種もあります。例えば官僚の方の国際会議などもそうだと思うんですが、同じ局長クラスで日本だと60代のおじいちゃん、海外だと40代のそこそこ元気がある人だと、どうしても体力で負けてしまうと思うんです。非常に若いからと言って別に知識があるわけではないけれども、体力は相対的にある。そういった若い力を活かしていくことは1つ大事なかなと思います。

あとはよく言われる話ですが、雇用の流動化。定年延長義務化という話もありますが、逆に定年廃止と雇用規制の撤廃をセットで行って、だれもが働ける社会、若者であっても高齢者であっても女性であっても、だれでも働ける社会をつくることによって、課税基盤の強化ということがまず大事だと思います。

3点目はもう少しアクティブな提案と申しますか、今、経済学者のポール・ローマーがホンジュラスでチャーターシティという構想を打ち立てています。うまくいくかわからないんですけど、要するにチャーター、ある種憲法のようなものを定めて、1つの国の中に治外法権的に1つの特区をつかって、それで一から都市をつくるという構想です。成功例は香港やシンガポール。一方で失敗例もたくさんあって、それがうまくいくかどうかかわからないんですけど、これからの日本にはそういう日本全体でどうにかしようということだけではなくて、都市単位でどうにかしようという発想が今以上に重要になってくると思います。

現在の日本は過剰なユニバーサルサービス、過剰かどうかは分野ごとによるんですけども、本当に必要なところに福祉が回ってなくて、逆に一部では過剰に保護されているという状況がある。日本中にユニバーサルにすべてを保護するというよりも、逆に治安維持ですとか少子化対策、貧困対策などベーシックなサービスは国家が行って、都市ごとに社会保障や税制を含めた大胆な実験を促していくことが必要になってくると思います。例えばある都市だったら、その都市内の企業に対する投資には課税をかけないで国際競争力を保持するとか、ある都市は法人税を下げるとか、ある都市は福祉が手厚い代わりに消費税が高いとか、そういうふうに日本という枠組みではなくて都市ごとにもっと特色を出していてもいいというか、逆にそれしか可能性はないかなとも思っています。

2050年の日本ということで、このような仕組みが少しずつでもそろっていけば、日本で

は複数の「中心の都市」が世界の優秀な人材を集めているかなと思います。

高い教育水準、治安の良さ、高度なインフラが揃った国や都市というのは、実は世界的にもあまり多くはありません。これは 2012 年現在も日本の武器ですが、今後も変わらずに日本の武器であって欲しいと思います。

都市を移動することによって、人生を選ぶような時代になっていればいいなどは個人的には思います。

そのときには医療技術の発達によって平均寿命が 100 歳を突破しているかもしれませんが、高齢者や女性であっても誰もが働ける社会が必要かなと思います。

幸福というのは基本的には当たり前の話ですけれども、人によって違うと思うんです。人によって違うからこそ 2050 年の日本には多様な幸福を選べる社会になってほしいなど。多分 2050 年にこの半分ぐらいの方は生きていないかもしれないんですけども、私は多分、平均寿命を考えると生きているので、そういう社会になっていきたいと思えますし、そういう社会を生きる者の責任としてこういうことを考えています。

どうもありがとうございました。

○阿部部会長 ありがとうございました。

これで今日報告いただく委員の発表はすべて終わりました。ここからは本当に約 1 時間ありますけれども、議論をさせていただきたいと思います。どなたからでも構いませんので、御意見またはそれに対する反論等でも構いませんので、御発言いただければと思います。

あんなに前回みんなしゃべったので、しゃべらない面子だとは思いませんので。では、いきたいと思います。

○石戸委員 質問なんですけれども、20 代の生活満足度 73.5%というのは、どういう層を対象にどのぐらいの人数で出た数字か教えてください。

○古市委員 最後に参考文献で出典を載せているんですけども、内閣府の国民生活に関する世論調査です。なので内閣府のその調査のページを見れば、どのようなサンプルをとって、どのような人数にとったかということがわかると思うんですが、基本的には内閣府がこの 35 年ぐらい継続的にとっている調査なので、調査としての信頼性は高いものだと思います。

○石戸委員 ありがとうございます。

○阿部部会長 ほかいかがですか。

○上村部会長代理 部会長代理という立場なので余りしゃべらないようにしようと思っていたのですが、議論のきっかけとして話させていただきます。

永田委員と新田委員から家族の大事さという話がありました。ただ、今は家族が崩壊していて、確かにある程度は家庭内福祉を供給できるような人たちもいると思いますけれども、今後、人口経済がラディカルに変わってくる中で、単身世帯がすごく増えてくる。このときにもう一度、昔の日本みたいに家族をまた持つてくるということについて、どう考

えればいいのかということを知りたいと思います。

○永田委員 戦略1～3をもう一回読んでいただければ御理解いただけるとと思いますが、2つのアプローチを考えています。要するに長期的な展望で幼少時からそういう教育をしていくということです。徳育の面からのアプローチ。もう一つは政策的に小さな桃源郷を特区としてつくっていく。その中には次世代を担う若者が興味を持つような仕組みを入れるのと、企業とか個人がそこに行ったら幸せに暮らせるというような、補助金でも税制でもいいのですが、そういうものを準備していくのです。

それは地方でなくてもいいかもしれません。都会でも、例えば、複数世代の居住空間を考える場合、マンションなども、玄関は1つ、浴室やキッチン、リビングなどの生活共有空間も1つだけれども、寝室や子供の勉強部屋などは、それぞれの世代ごとに独立した区画を確保できるようなハードをつくって行って、複数世代が住みやすいような環境を整えると、拡大家族ネットワークシステムの構築を支援するような政策を強化していくということです。それは地方でも都市でも展開していけると思います。

その中で、先ほどのご説明でも申し上げました家族の中のいろいろな問題が出てくると思います。それは今に始まった問題ではなくて、人間が生きている限りは過去からずっとあるわけであって、そのバランスを良好に保つことが大切だと思います。個人が自分だけの欲求をある程度コントロールして、個の集団としての家族の絆を大切にするのか、あるいはもう自分を出ていくのか、それは個人が決める問題ではないでしょうか。ただし、拡大家族ネットワークが進むことによって、理想的ないい大家族もたくさんできてくると思います。

戦後、核家族化が徐々に進んでいった傾向に、どこかで政策的に歯止めをかける必要があると考えております。先ほど、4世代が同居する大家族を紹介しました。実際にそういう複数世代が同居する大家族が東京にもあるのです。そして、ぜいたくはしていないけれども、本当に自分は幸せだと本人が言っているわけです。1事例という点でもいいのですが、その点が増え、点と点が結ばれて線になって、線と線が結ばれて面になっていき、それが各地に波及していくと、2050年にはある程度の拡大家族ネットワークもでき上がるのではないかと考えました。

○新田委員 永田先生のお話に尽きると思うんですが、私の場合は特に酒田という田舎でございまして、小さいコミュニティから言えばコミュニケーションが先ほど福島さんが極めて大事だとおっしゃっていましたが、血縁のつながっている家の中にいる家族なんです。少し大きくすると会社の組織もやはり家族で、つながっているとか、絆とか、支え合うとか、そういう社会なのかなと思っています。

弊社の先ほどの広報課長も2人目ができたということで、出生率は2かなと。3を目指して頑張ってくれとは言っているんですが、極めてつながっていて、本当にお互いに支え合っているということが幸福につながると思っていますので、日本が人口が少なくなれば海外とか、困っている人たちを受け入れることも選択肢としてはあると思いますので、社

会の在り方が極めて大事であると認識しております。

○阿部部会長 恐らく上村委員がおっしゃったことと、お二人がおっしゃったことと、問題意識としては同じような方向にあるのかなと思うんです。恐らく私が察するに、家族というものが血縁でつながっている、私たちが今まで考えていた家族というものに限定されるのか、それよりも今、新田委員がおっしゃったように、もう少し地域の人とのつながりですとか、同じ企業の中でのつながりというのも日本では昔からありましたし、そういうつながりも含めたようなバーチャルファミリーみたいな、そういうようなものを意図していらっしゃるのかということかと思うんですけれども、そこら辺はいかがでしょうか。

○永田委員 実は家族のつながりが強くなると、近くに住んでいる親戚も、地域も絆が強くなるのだと思います。要するに、親戚でない人たちもいるわけではないですか。そういう人たちのネットワークも実態としてブータンでは強くなっています。ですから、血縁関係のある家族の絆が強くなれば、お隣やご近所といった地域社会・コミュニティーの人と人のつながりも絆も強くなるのです。

要するに地域の絆が強くなるので、地域の集積である国家の絆も強くなる、その方が自然ではないですか。生物として生まれて家族と住んで独り立ちしていくわけですが、独り立ちして独立した家族を営んでも、その上位概念として一族、同族、同郷、民族といったより大きな関係性は持続するわけです。太古・原始の時代から、生きとし生けるものは、社会という関係性の中で、まさに集団で生きています。そういう家族を核としたリレーションシップを強化してことは非常に自然な形ですから、やはり永続性、サステナビリティという点から強いのではないかというのがGNHの考え方なのです。

○阿部部会長 皆さん、この点について御意見等ある方はいらっしゃいますか。家族の在り方ですとかつながりという点で。

○小室委員 直接につながるというよりも、ちょっと補足というか私の感じたことで、大家族化、もう一度大家族で暮らしたいという気持ちは、私は港区に住んでいて核家族なんですけど、核家族の世帯にもあります。現実的に何がそれを阻んでいるかということを考えたときに、何度も自分の親を近くに呼び寄せて一緒に住みたいと思ったんですが、親は土いじりが好きで、都会には土がない。これがすごく大きなハードルで一緒に住めない。それをしてしまうと結果として好きなことをなくさせてしまって、認知症などになったらいけないと思うと、結果として離れたままというのがあって、何かしら私は今までの御発言の中で大家族化を再度進めるということは、決して若い世代が望んでいないわけではなくて、望んでいるのだけれども、現実的に先ほど古市委員が言っていたチャーターシティという発想の方に持っていこうとしたときに、何がハードルになるだろうとすると、世代の違う人が好むような土地の状態になっていないということが大きいなと思っていて、何かそういう構想を真剣に考えていくのであれば、港区の大都会の中でも農作業ができて、自分の生活を行えるというような、違う世代の方が快適に暮らせるという状況をつくらないといけないのであろうなと思いますが、それはすごく望まれていることで、希望する人は

いると思います。

○永田委員 多様性の観点から考えると、まさしくそうです。都会に来るのか、都会の子どもたちが田舎の親のところに帰るのか、どちらかしかないわけです。でも、どちらもありでいいと思います。それは相互の話し合いの中でどちらでもいいと思うのです。そういうどちらでもいいような寛容性と包摂性に満ち溢れた流れに持っていけば、2050年の理想の姿というものが出てくるのではないかというのが、私の今の提案だったのです。

○阿部部会長 そこに同じ地理的な場所に住んでいるということが条件としてあるのかなと、私なんかは感じました。というのは、絆は必ずしも、それも2025年の話ですからIT技術等もすごく進んでいると思いますので、それぞれの自分の生きたい場所で生きながら絆は強いということは可能なんではないでしょうか。

○永田委員 まさにスープの冷めない距離と言うではないですか。ですから別に同じ玄関から入る必要もないと思います。でも助け合うとか、声を掛け合うとか、ちょっと何かあったらすぐ行けるとか、そういうものがすごく大事で、私が戦略の中で1つ言ったのが、家族との距離を近く保って、家族と過ごす時間を大切にし、なおかつ仕事の効率やクオリティを落とすことなくリモートで仕事ができる環境整備というのは、そこに目的あって、ここまでITが進んでくると、あと10年もすればもっとすごいことができると思っています。

私はほとんど自分の執務スペースに腰を落ち着けていません。1か月のうち数時間しかいないのですが、それでも全然問題なく仕事ができます。こういう状況ができれば別に会社なんか行かなくていいよ、好きな場所で仕事をしてください、ということも可能です。そういうITをうまく使えるように企業を指導していくとか、企業の中でトレーニングする。こういうことはすぐにはできないではないですか。こういうことをトレーニングする間はちゃんと会社に来てね。ある程度慣れたら、このぐらいの期間、もっとできるようになったらこれだけでいいよという形で、企業がそういうものを受け入れやすいように指導していけば、就業形態や通勤事情、家族とのかかわり方・時間の過ごし方などの生活パターンにも変化が生じてくると思います。勤務地や通勤事情の障壁が低くなれば、地方にもランチを設けた方が得だよ、とかわかったら、企業もすぐにランチをつくるでしょうから、地域活性化にもつながるかと思います。

○小宮委員 先ほど小室委員がおっしゃった、何が親が都会に来るのを拒んでいるのかという話で、私も別の観点もあるのかなと思ってお話ししたいと思っていますけれども、むしろその地域に血縁があって、都会に来るとまた一人ぼっちになってしまうという気持ちがあって、私の親なんかもなかなか都会に来られないなということを使うんです。それで考えるときに、では私が行くかということになるんですけれども、その問題は、では行って私は何を仕事するのということになってしまうんです。

そうなったときに、では生活の糧というものと、住んで血縁を保つということが実は一体的になっているんだなと感じるんですけれども、そのときに地方で仕事とか生活の糧を

得ていくことを考えるというのが、もう一つ都会で過ごすことと別の血縁のある地域で過ごすことの一番重要なことかなと思います。

その仕事は一体何だろうというときに、まさに平牧みたいなケースがあるんでしょうけれども、その地域の資源を使って循環させるようなことを産業にしていこうということが、すごくつながりもあって、仕事もあってということも1つの実現の姿かなというのは思います。

○福島委員 私も皆さんのお話を聞いていて、多分、どうやって人と人とのつながりを強めていくかということに共通の問題意識をお持ちなのかなと思っておりまして、今、出ていた話が大きく3つに分かれるとすると、第1に、何とか家族という単位をもう一度回復していきましようというお話。第2に、小室委員がおっしゃっていましたが、家族という単位を増やしていきたいが、どうしてもなかなか難しいハードルがある場合にどうしたらいいかという問題。第3に、そもそももしかしたら暮らし方の選択の問題なのかもしれないけれども、例えば上村部会長代理がおっしゃったように、現実には単身世代というものがこれから将来的に増えていく可能性があるとする、その人は1人で暮らしていくわけなんですけど、ではその人がどうやって人とつながっていくかと考えたら、家族以外のソリューションがもしかしたらあるかもしれない。

それは私が前回申し上げた、家族ではない例えば高齢者の単身でお住まいになっている方に、例えばケア付きマンションに住んでいただいて、常に何かあったら呼び出してお手伝いしてもらえようという状況をつくっていくというのも、1つあるなと思っておりまして、先ほど福島先生が回していただいた紙を見ますと、メッセージの中に「俺はお前のそばにいるぞ」と書いてあったのに私はすごく感動して、だれがいてもいいんですけども、そばにだれかがいるということがすごく大事で、そういう状況をつくっていく戦略というものを、いろんな人たちの暮らし方の選択に合わせて、考えていくというのが大事なのかなと思っております。

雑駁でございますけれども、以上です。

○永田委員 私は先ほど多様化ということをお話しましたが、シングルマザーもものすごく多いのです。私は学校法人の理事長も兼務しておりまして、うちの幼稚園に園児を預けておられるお母さんにもシングルマザーは結構多いです。多分、結婚しない女性、男性も今、相当な数で増えてきています。こういう方々を地域で支え合う方向性はすごく大事だと思います。周りが核家族だらけで、その中に独身者がいたってなかなかアクションしにくいけれども、自分は4世代家族でこんなところに住んでいる。あのお兄さんは1人だよ。ご飯でも食べに来ない？というような、コミュニティー間の口コミ、情報ネットワークというものは、たとえば、ネット上のお見合いサイトなどよりも、よっぽど血の通った人間的な温かいインフォメーションだと思います。

要するに、拡大家族ネットワークシステム化を expand することによって人を呼びやすく、ないし弱者とは言いませぬけれども、孤立化しやすい人も地域全体で巻き込んでいくよう

な小さな桃源郷を幾つかつくっていったら、それが見本になって、成功すれば全国に広がっていくかなというのが私の戦略2のところでは。

○古市委員 よくこういういろんな社会問題が起こると、よく解決策として毎回挙がるのが家族と教育と地域と若者だと思っんです。まさにそのとおりで、結果的に拡大家族みたいなものができること自体、私は当然反対はしないんですけれども、ただ、それを目的にするのはどうかなという思いがあるんです。

人は基本的にないものねだりをすると思っんです。例えば家族制度が今よりもよかったとされる時代、ちゃんと家族の絆があったと今からみんな言う 1960 年代とか 1970 年代の人々にとって、家族は逆に重荷でした。家族から出られない。地域の目がある。そこから何とか抜け出したいというのが当時の人々の少なからずの思いでした。

例えば犯罪発生率とかそういう率を見ても、かつてはよかったかと言うと決してそんなことはない。逆に家族の崩壊ということが言われるような現代の方が、よっぽど犯罪発生率がすごい低い。治安もよくなっている。家族がさも何かすべてを解決するような、解決策になってしまうことに私は違和感を覚えました。

もう一点、今日の発表の徳育について1つ言いたいことがあったんですけれども、例えば社会に役立つ自分をつくらないといけないとか、愛国心教育とか、それは別に否定はしていませんけれども、ただ、現状として特に今の若者に関して言いますと、今の 20 代の 6 割以上が社会のために何かをしたい。自分のことよりも国や社会のために何かをしたいと思っています。これは統計をとり始めた 1960 年代以降、最高の数字です。

そういう教育はしなくても、既に十分日本の若者は社会のこととか何かをしたいと思っっている。あとはその仕組みづくりだと思っんです。だからそういった形で教育とか家族がすべてを解決するのではなくて、逆に具体的にどういう仕組みをつくっていくかという議論の方が大事なのかなということが今、話を聞いていて思いました。

○阿部部会長 若者が国のために何かをしたいということが出来るような環境をつくるということですか。

○古市委員 そうです。国とか社会のために何かしたいと思っっている人は十分にいます。あとはそれをつなぐだけだと思っんです。だから徳育とかそういうことは、逆にもう行われているから、既にそういう思いは十分に育まれているから、逆に教育ではなくて仕組みとか居場所とか場所をつくっていくことの方が、よっぽど大事だと思っます。

○玄田委員 今日、御発表があった食であり家族でありコミュニケーションを語る時に、共通に課題となる概念があるのではないかと思っっています。それは何かというと「所有」に関わる議論です。

戦後数十年かけてつくられてきたのは、個人所有をするということを当然の前提として成り立ってきた社会で、食べ物もどれだけ自分で確保するか。家族という個人の単位。それで今、家族が非常に縛られているのは、土地というものに非常に家族というものが大きく左右されている。

所有というものが2050年にかけてどうあるのか。戦前まで振り返ると食で地域であれ、かなり共有という概念がむしろ大前提にあって、その中に部分的に個人所有というものがあつた。特に大きな土地だと思うんですけれども、土地をみんなで確保するのか、一人ひとりに分断して家族だけで所有していくのかというのは、とてもこれからの家族の在り方であり、コミュニケーションもそうだから、コミュニケーションも所有するものをお互い違うものを所有するから、コミュニケーションが成り立っているんだと考えてきた近代の考え方を変えていくのかという、所有というのがどうあるかということが問われているように思う。

それはもしかしたらとても大きな問題で、極論をすれば憲法の問題ではないかと思う。だから2050年に向けて個人所有をベースとした社会をつくっていくのか、もう少し古い日本にさかのぼれば、総有とか共有、特に土地をベースにして考えるかで、若者に機会が増えるかどうかとか、家族が自由になるかどうか、世代間が連携できるかというのはすごく大きく形が変わってくると思う。

そういう意味では、先ほど福島さんがおっしゃった地球という概念を2050年に考えるのはとてもいいかもしれない。地球というものが前提として個人所有ができない最も最たる概念であつて、これは共同で所有し、共同で責任を持たなければならない最も象徴的なものだから。ただ、勿論100年前の反省があるわけで、我々は計画経済とか社会主義経済に求めたような所有の夢というのは、この100年間で失敗を経験したわけだから、それとは違う共有とか総有というものがあつて得るか。あり得るとすれば、その中で成り立っている地域とか家族とかコミュニケーションというのはどういうものか。所有ということがすごく重要だなと思います。

以上です。

○阿部部会長 質問させてください。例えば土地の所有が全部共有になったら、家族はどう変わるんですか。ちょっとついていけなかったので説明をお願いします。

○玄田委員 私もわからないんですけども、新田さんの方が詳しいのではないですか。昔の農業の世界はみんなが土地を共有したものでしょう。どうぞ。

○新田委員 戦前、うちは小さくても地主だったんです。ですから殿様の文化がずっとあつて、地主制度があつて、そこから農地解放になったわけで、そういう部分で言えば今のほうがむしろ民主的かなという感じはするんです。

○玄田委員 難しいんですけども、確かに昔のように地主と小作のような、表面的に見ると非常に縦社会、身分社会なのですが、その中でそれぞれが地域の中の役割を担うことで、地域をまとめていた部分があるわけで、その家族というのは決して地主が偉い家族であつて、小作がという階級社会を考えることもできるけれども、そうであるというふうに決めつけることもできない。

つまり、今みたいに土地によって家族の姿が分断されるのか、多くの土地をみんなで共有することによって、家族という単位を本当に血縁のレベルで見ると、地縁という家族

で見るのかというのは全然違ってくるから。

○新田委員 所有するということは国もそうだと思うんですけども、先ほど申し上げたんですが、国という概念が意外と平和の障壁になっているみたいなところが非常に見えたりして、資本主義の先はどうなるのかというと、共生ある資本主義でないといこれからはいけないのかなとか会社をやっていて思うんですけども、人が増えて経済が繁栄していく社会は、どこかでやはり限界が来るのかなと、食べ物をつくっているとよく思うんです。そこを人が幸福に生きるという前提で考えると、方向というか舵は変えなければいけないのかなと最近思っています。ただ人口が増えればいいという時代は過ぎたのかなという感じはします。

○小宮委員 玄田さんの所有とか共有という話については非常に面白く思うんですけども、国全体が同じ基盤の中で所有と共有という概念自体を同じく持っていなければいけないのかということ自体は、変わっていくのかなという気はしているんですが、それはまさにチャーターシティではないんですけれども、私は所有の概念が好きだという人たちが集まっている都市と、みんなでシェアし合おうという人たちが集まっている都市、そういうものがそれぞれ選択肢として存在することができるのかなというのは、そういう社会はあるのかなというのは考えたいと思います。

○玄田委員 それは個人選択ではないんです。社会のルールだから。2050年にアナーキーを選ぶんだったら別です。好きな所有で仲間をつくってください。でも最低限のルールというものがあるわけで、今の憲法は私有財産はあくまで所有だから、それをベースにして今、共有というものを部分的に考えようとしているわけで、それぞれ好きなものを選びましょうということにはならない。だから言っているのは2050年で問題提起しているのは、どこにベースラインを置くか。昔だと港でも農家でも共有地というものがあった、ある程度共有を前提として、その中で部分的に個人所有が認められていたというのが、むしろ私たちは慣れていないけれども、長い歴史を見ると日本社会、特に農村社会というのはそれに近かったかもしれない。

そういうことに戻った方が幸せになるのかどうかというのは個人の選択の問題ではなくて、社会がどういうルールをデフォルトとしておくかという問題なんです。デフォルトをどこに置くかということを行っています。今のデフォルトはかなり個人所有を前提としていると思う。それで発展してきた。多分、高度成長にはそれは向いてきたんだけど、先ほどの豊かさの在り方が違うと考えたら、どこにデフォルトを置くかということの問題提起したつもりなんです。

○阿部部会長 今の話にもつながっていくと思うんですけども、共有地を増やす、共有で地縁という言葉かもしれないし、コミュニティという言葉かもしれませんが、みんなでその土地の人たちが使えるようなリソースみたいなものを増やしていくという話は、実はほかの委員の方々のプレゼンの中でも少しずつ出てきているのではないかと考えていて、例えば上村先生が屋台村みたいところでみんながご飯を食べられるようなところがあっ

たらしいというのもあったかと思えますし、地域に拓かれた教育という話もあったかなと思えます。その場はやはり共有の場で行うわけです。

そういう意味で地域の在り方をこれからどうしていくか、これから議論していきたいと思うんですけれども、これは古市先生のチャーターシティの話にもつながっていくかと思えますし、小室委員がおっしゃった親と一緒に同居したいと思ったときに、親はこちらにいて、子どもはこちらにいてという現状。それももともとは都市と地方というふうに今、分断されていて、若者の仕事も高齢者の方が憩う場所というのがすべて同じ地域にあれば、そういう問題は起こらないわけです。

ですから、これから地方の都市をどうやって活性化させていくかという話につながるのではないかなと思うんですけれども、そこら辺で皆さんの御意見をいただけないでしょうか。私の言っていることが全く間違いかもしれないし。

○國光委員 色々と詰めていくと、部会長がおっしゃったように地域、教育、住民の成熟度のような話に行き着くと思うのですが、スキームで考えたときに地方自治の在り方を今後どう考えるかということが、非常に大きな論点なのではないかと思っています。

所有の問題にも関わることかなと思っていますのですが、私は医療という社会保障に関連した仕事をしているので、自助と共助と公助という枠で捉える傾向がありまして、自助は自分、共助は家族、地域、友人、NPOなど、いわゆる「新しい公共」に該当するような部分、公助がいわゆる行政が担う税財源によるサービス部分ですが、その公助の部分について、地方よりかなり国に寄っているということが金額としても規制の部分でもありますが、それをどういうふうに地方に落としていくのかという話になるのかと思えます。

地方に落としていったときに、実際例えば欧州や北欧であるとか地方自治が進んでいる例を見ても、かなり地域によってばらつきが出てくるんだらうと思います。中にはやはりサービスを保つ上でも、それを支える財源がないような地域というのが出てくるのではないかなと思います。

そういうところをどういうふうに、Well-beingを保つ医療や教育や最低限のインフラを保つようなところを確保していくのかなということが重要で、それを1階部分と捉えたときに、さらに2階部分でいろんな幸福の姿を古市委員のおっしゃるように選べるということ、その自由があるということがすごく今後の世代に大きいのではないかなと思います。その1、2階部分をそれぞれをどういうふうに担保していくのかというのが、大事なのではないかなと思ったところです。

○福島委員 本当は玄田委員がおっしゃっていた所有の話に、障害学（disability studies）の中でも、例えば立命館の立岩さんなどが言っている議論があって、個人的にはお話したいんですが、ここではマニアックになるからそれは置いて、最後にプレゼンされた古市委員に伺いたいと思っています。

私が勝手に書いて出した方のペーパーで、幸福というものは3つの階層で考えればどうかと書いていて、根底的な部分、ナショナルミニマム的な部分がまず、そこに基底部分が

あって、一番上には個別のそれぞれの価値観を、自分の手づくりの価値観で幸福に生きていくという部分があって、だけれども、真ん中辺りにすごく広大な領域を私たち自身が既製品としての価値観をつくってしまっている。それがリスクが大きい、危険だから何とか手づくりの価値観に従って幸福の追求をできるようにした方がいいのではないかということを書いているんですが、それは具体化するときの方法として、おっしゃっていたチャーターシティというのは非常に面白いアイデアだなと思ったんですが、ちょっと伺いたいですけれども、ローマーがホンジュラスで取り組んだというのは、その後どうなっているのでしょうか。つまり、現在どういうふうになっているのか、現在進行形なのか、それをもしデータがあれば、情報があれば伺いたいです。

○古市委員 現在進行形で、まだ成功か失敗かわかりません。

質問にちょっと付け加えてお答えさせていただきますと、チャーターシティをするにしても何をやるにしても、前回の小室さんの発表にあったような労働時間というものが非常に大きい問題だと思うんです。

私は大学時代1年間北欧のノルウェーという国に留学していました。そこですごいびっくりしたのは、人々の余りにも働かないということです。地方自治がすごい発達していると言いますが、ある種当たり前で、みんな仕事が3時とか4時に終わってしまうんです。その後、膨大な夜寝るまでの時間を地域の人と別にご飯を食べてもいいし、ある人は地域の人と地方議会などに行ってもいい。そういう地方自治とかそういうもので、結局は仕事以外の時間をいかに確保できるかという問題に結構集約される気もするんです。

だから先ほど新田さんがおっしゃっていたように、地方の方が実は幸せという話も、もしかしたら都市、地方の問題というよりは、もしかしたら労働時間の問題かもしれないと思ったんです。労働時間、働くということがそれが所有なのか共有なのかはわかりませんが、それは面白い議論だと思うんですけれども、ある種働かないような、働く時間を制限するような仕組みづくりというものは、逆に行政ができることですし、前回小室さんが提案していただいたような形でのものが、ベーシックな、まずやるべきこととして大事なのかなと思います。

○阿部部会長 議論をつなげていただいてありがとうございます。

それでは、先ほどの國光委員の御発言に。

○上村部会長代理 恐らくここで話している議論で出てきているのは、地域によってある程度ばらつきを持たせて、チャーターシティもそうなのですが、試験的にやってみようということです。確かにその方がいいかもしれませんが、ただし、試験的にできない地域をどうするのかという、一種の公平性の問題をどう考えるかは結構難しいです。

つまり私たちは、一国全体の幸福の話をしているんだけど、その地域だけの幸福だけでとりあえずやっていいのかどうか。ただ、これは霞が関的な罠に陥っています。霞が関は一国全体でやろうとして、失敗することがある。一国全体でできるのは難しいけれども、とりあえずできるところからやるというように、踏ん切りを付けられるかということ

です。そういうような分権化は、私は非常に大事だと思っています。

もう一つ、分権がすごく大事なものは、私の報告でも話しましたが、自分たちで何かをするという参画プロセスや、自発的に参画できる仕組みにしていくことで、住民の幸福度は明らかに高まります。そういう権限をどうやって移譲するかということは考えないといけないなと思います。ですので、できるところから試験的にやっていくということが私はいいのではないかと考えていて、どうもユニバーサルにやっていくと結構どこかでつまづくことになる。試験的にやっていくという踏ん切りをつけた方がいいのではないかと私は思いました。

○小室委員 少し前の意見に1つというのと、皆さんに質問というものがあって、少し前のところで共有とか土地の問題というのがいろいろ出てきた中で、私が1つ普段感じていることで、古市委員の御発表の中にも実は若者は何かしたいと思っているというところがあって、私が12年間ずっと続けているプレゼン講座があるんですけども、それは学生に向けてずっとボランティアでやっているものなんですけど、12年間見ていると決して学生は悪くなったとか、最近よくゆとり世代だからという話を聞くんですが、むしろどんどん優秀になっているというか、非常に問題意識も高く、毎回自分でテーマを決めてプレゼンをさせるんですけども、今の年金問題について学生は物すごく熱くプレゼンをしていくところがあります。

私がこのボランティアを12年間続ける中で何度もくじけそうになったのは、場所が見つからないというものがあって、今は仕方がないので私が全部会場費を出すという方法で講座を続けているんですけども、学生は私の講座がないとディスカッションする場というものが、普段そういった高い意識の子たちが集まってディスカッションする場が全然ないそうなんですけど、こうやってだれか大人が関わってあげて、違い世代の子に何かを教えてあげて、彼らの中で刺激が起きてコミュニケーションがすごく発達してという場というのは、本当にリアルな場所がすごく必要なときがあって、この会場を借りるのに何においても高いということが人の集まることを阻害しているというのがある。

これは本当に上村先生が言っていた屋台村の話もそうなんですけど、だれもが気軽に使えて、コストが安いということは何より大事なんですけども、そういう場がないと、最初のとっかかりのコミュニティすら生まれません。そこで育つべきコミュニケーション力も育たない。時間ができてもそこでボランティアをすることにコストがかかるのでできないという大きな問題があって、どんな都会をつくるにしても、どんなチャーターシティをつくるにしても、そういう場所というものをどれだけつくることできるかという戦略が、結局そこでコミュニティが発展するかどうか非常に重要であるなと思ったというのが1点です。

もう一つは、前回私たちの発表がみんなして長かったことによってディスカッションが短かったので、今日のせっかくの時間の中で前回の意見に対しても何かディスカッションをいただけたらありがたいなと思ったということと、私は明日20分間、国会でプレゼンをする時間を急にいただいて、この労働時間に対する問題をプレゼンしようと思っているん

ですけれども、なので前回とほぼ同じプレゼンをしようと思っっているんですが、きっと足りない視点だとかいろいろあったのではないかと思ったので、それに対してもいろいろ質問とか意見をいただいたらありがたいし、前回のほかの発表者の方についてのディスカッションも、もっとした方がいいかなと思います。

○阿部部会長 ありがとうございます。

前回ほとんど議論する時間がなかったですね。ついこの間だったので記憶も新しいと思いますので、前回まで戻って御発言いただければと思います。

○上村部会長代理 小室委員の報告で思ったことは、非正規労働の方が結構増えているので、非正規労働の方はそういう残業がどうかということの問題が余り起こらないんです。そこをどうお考えか。つまり、ホワイトカラーの方々が残業で非常に大変な問題を起こす。これは非常に大きな問題です。ただし、現状非正規の方が結構増えていて、その人たちをどう考えるのかというのは、1つ政策的には大事なポイントかなと思いました。

○小室委員 残業問題が起こらないというのは、どういう意味でしたでしょうか。

○上村部会長代理 つまり残業問題というか、時間で縛られているということですね。時給幾らということで働いているので、自分自身で調整ができないということです。

○小室委員 残業自体はある。

○上村部会長代理 そうです。残業自体はあります。ですので、結局非常に収入は低いということがあります。

○小室委員 残業自体の多さはあるけれども、むしろそれを好んでやる人もいないか。

○上村部会長代理 それもあります。つまり、残業しないと生きていけないという人も現実にはあると思います。

○國光委員 労働時間を確かに短縮すると多くの問題が解決するというのは、そのとおりでないかと思うんです。ただ、完全ではない部分が、非正規の問題もそうなんです、やはりあるのかなと。

例えば、生活実感に即したごくごく素朴な質問なんですけれども、つまらない話で恐縮ですが、6時に帰れた場合に、皆さん家や地域に素直に帰るのかなと・・・。本当に行動変容を起こすのかという点が気になっています。2050年ぐらいにはそういう社会になっているのかもしれないけれども、例えばここ霞が関でも、皆さんものすごく残業していますが、さあ6時に帰りましようとなったときに、実は家に帰る人はほとんどいなくて、新橋あたりに飲みに行ってしまうたりしないかと。そういう特に古い体質の組織に属される方にはなかなか難しく、すぐそれが幸福のエンパワーになるのかというと、飲食業を流行らせて終わりみたいにもなったりしないのかなというのが素朴な疑問です。講演なさっているときとか、企業側にどのように受け止められるのかというのが知りたいです。

○小室委員 ありがとうございます。

上村さんの非正規労働に関してなんですけれども、1つは私は労働時間に圧縮を入れる

べきというのが1つ勿論あるんですが、単純にどの企業も圧縮を入れる、規制を入れるというのは日本社会で非常に難しいと思っているので、どちらかと言うと労働時間が長くなると企業側の払うコストが高くなるという構造をつくるべきだと思っているんです。今とか1.24倍しか払わなくてもいいんですが、時間外労働というのは2倍近く払わなければいけないという状態をつくると、非正規労働の方に対してそれが同じように、8時間を超えた場合というのは非常に高いコストを払わなければいけないということにしていくことによって、生活するために長い時間働かなければいけないという人も、今までの残業時間の半分で同じコスト、同じ収入が得られるので、もっと短い時間になるでしょうし、非正規労働の方に対して長時間労働をさせるということへの抑制にもなるでしょうしというところで1つあるのと、そもそも今の長時間労働で非常に正規社員が残業時間を物すごくしていることでコストがかかっている、減っている利益というものを非正規労働で何とかして、利益が少ないので非正規労働に回していくという考え方があるんですが、そもそももっと日本の企業は短時間で高い生産性をあげて利益を確保できるので、非正規労働ではなくて正規雇用ができる、利益がもっと出せるんだと私は考えているので、もっと利益の出せる組織にすることによって、そもそも非正規労働というものが減るという考え方、ちょっと大きな時間の単位でなんですけれども、なので短期的な解決ではないのですが、そう考えているというところが1点です。

國光さんより御質問のあった18時に会社が終わると帰るのか。これは私どもがコンサルしている会社さんで、必要に迫られている人は即帰るようになり、そうでない人は最初はそもそも10時までには帰ってきてくださるなど言われている人たちなので、逆門限を設置されていて、夕飯要るとか要らないとか、いないことに慣れている家庭。なのでそんなこと急に帰ってこられては困ると思われている家庭に関しては最初は帰らないんです。でも、それはそれでその人に本当に必然的な理由がない人でしたら、最初は飲み屋さんを流行らせることは日本にとってはとても大事で、飲食業を流行らせることはとても大事なので、最初に行っていただくことでもいいから会社を出てもらう。

会社を出る人がいなければ、だれかがいることによってそこにストレスを感じて自分もいなければいけないというふうに感じたり、せっかくテレワークで家で仕事をしていいとなっているのに、家に帰ってもずっとパソコンを見ているワーキングマザーというのは物すごく多いんですけれども、誰かが働いてしまっていることによって、だれかも引きずられて焦らされて、ずっと仕事が頭から離れない。その親と接する子どもというのは物すごくつらいので、それに関してはまずは一旦何でもいから帰ってというのでいいと思っています。

でも、その方たちは私たちがその後見ていくと、一旦時間ができたことによって最初は疲れていた人は寝るだけ、飲みに行きたい人は飲みに行くだけなんですけれども、そこがしっかり時間が経ってくることによって家庭との時間というのができてきたりとか、どうしても家庭との時間はつくれなかったという人は趣味に行ったりだというので、少し時間

はかかるんですけども、必ず違うアクションを起こし始めます。そのことが仕事へのインプットになったりというところは、最初は時間の使い方に慣れてなくて飲みにしかななくても、だんだんと変わってくるという形になって、仕事へのよい効果はかなり出てくるかなと感じています。本人たちが帰りたくないから帰らなくてよいという状態にしていると、そこに非常にストレスを感じる人の層の方がこれからは介護、育児、時間制約を持つ人のボリュームの方が、非常に高くなるというような形なのかなと思います。

御回答になっていましたでしょうか。

○國光委員 ありがとうございます。

○玄田委員 非正規問題と労働時間の問題は混ぜて考えてはいけない。それは全然別の問題だから。今のいわゆる非正規の問題の根本は、労働の時間の問題ではなくて契約の問題なんです。有期雇用と無期雇用の間にある問題だから、実はそれは2050年を考えるときに議論してもいいと思う。先ほどの所有に若干関わってくるけれども、どういう契約の在り方がこれからの日本にとっていいのか。

今度、就業構造基本調査というものを5年に1回、今年やるんだけど、そこで新しい調査項目で「あなたの雇用契約期間はどうなっていますか」というものを入れるんです。その中で苦心して結局つくったのは「わからない」という項目を入れた。自分の雇用契約期間がわからないという項目。いろいろテストして、やはり入れないと世の中にわからないという人がたくさんいるから、これもよく調べないとわからないけれども、自分がどういう契約期間で働いているかわからないという人は、私は幸せな人は少ないと思う。多分。

そう考えると、杓子定規にも私はもうこれ以上働きませんというふうな、いわゆる私たちが目に浮かべるようなアングロサクソンタイプの契約概念が日本にいかどうかかわからないけれども、多分、自分がどういう約束の下に雇用しているのかとか、そういうものがわからない社会というのは多分幸せではないと思うんです。

だからそう考えたときに私には答えはないですけども、雇用にせよ家族に契約という言葉を使うのはとても抵抗があるけれども、コミュニケーションなんかは特にそうだけでも、日本人が幸せになれるような契約の在り方みたいなことというのは、今のすごく難しさを踏まえた上で、中長期で考えていくのはとても大事な観点ではないかと思います。

○阿部部会長 そこでもう一步進んで、どのような契約の方にすべきだということまで議論したいんですけども、玄田先生だけでなく皆様からも。日本は余り契約とはっきり書かない方かなと思っていて、私はアメリカで育ったので。どうでしょう。契約はなじまないでしょうか。

○新田委員 契約のことはわからないんですけども、うちは家畜を飼っていて、最もいい状態というのはストレスがない状態なんです。いろんなものにストレスがあるわけですが、生き物はストレスがないと非常に快適なんだろうと思います。ストレスというふうに感じない状態をどうつくれるかということは極めて大事なかなと。私は趣味的に楽しく仕事をしています。おいしい健康に良い食べものをつくるのが仕事なんです、それは生き

がいであり趣味でもあるので、みんながそう思うと残業もいとわない。家に早く帰っていても何もすることがなければつまらないし、だれかと触れ合っていてコミュニケーションできていると、ストレスも感じない。いい形のお付き合いになればストレスもないということだと思っんです。絶対的にそういう部分があるのかなというふうに、いつも我が社の豚から教えられます。

○阿部部会長 そのほかいかがですか。

契約の話に戻しますが、ストレスがないというのは私たちが通常考えれば、契約がある雇用というのはストレスがあるだろう。ほとんど今まで終身雇用で来たわけですから暗黙の了解として定年までとってもらえるということで非常にストレスがなかったわけです。それが期間付きということになると、それがストレスになるだろうと素人的には考えるんですけれども、そういう単純な問題ではないということなんでしょうか。

○玄田委員 本来的には契約というのはストレスをなくすために結ぶのが契約であって、お互いにストレスをかけ合う契約なんていうのは本来あり得ないんです。そういうお互いが持って齟齬をなくすようにして、お互いの権利とか義務を明確にするのが契約だから、契約があるからストレスが高まるというのは、それは契約としては非常に質の悪い契約で、だから普通はちゃんと業者と契約しているからお互い信頼してできるわけで、私が言っているのは、わからないというのが自分がどう処遇されているのかわからないということぐらいストレスがなくないかということを行っているわけです。そうなったときに、恐らくそれは幸福ではなくて、多分、納得です。納得ができていないからです。

○阿部部会長 納得できていない契約をしているからストレスが高くなる。

○玄田委員 1つ大きいのではないですかね。

ただ、もう一度言うけれども、契約書をつくってサインするような社会なのか、もう少し契約というものをどこかいろんないい事例とかを踏まえながら作り直すかどうか。2050年の議論というのは余りにも大きくて私はわからないけれども、そういう根本を議論しないと2012年の延長で議論したら多分、私はたまにこういう会議に出ることがあるけれども、10年ぐらい前に「21世紀ビジョン」か何かをやったときと余り変わらない議論をしているのかなという気もするんです。

だからどうしても今、直近のことで議論して10年ぐらい経っても全く進まないから、もっと大きくジャンプしてもいいのではないかと思って、あえて所有とか契約ということから議論しなければいけないのではないかとっているんです。

○阿部部会長 私もそれを感じます。余り今の財政状況などに縛られると発想が自由にできないので、バックトラッキングというやり方。2050年のあるべき姿から考えるということをもう一遍思い出していただければと思います。2050年に日本はどうあるべきなのか。

○新田委員 この部会の件で一番最初に報告したのは実は母親で、こういう部会に入るんだ。何が幸福なんだという話をしました。戦中生きてきた人間は生きているだけで幸福だろう。要は持続可能性なんですけれども、第三階層について福島先生から御発言がありま

したが、いかに生きられるか。

去年の原発のときもそうでした。我々の住んでいるところは東京よりちょっと原発に近くて190km圏内で、もしかしたら200km圏内が住めなくなるかもしれないと考えると、持続可能性がなくなる、生活ができなくなるかもしれない。非常に不安とかストレスが大きかったわけですが、まず生きることが大事だと思えるような状態になるのが極めて大事だと思うんですが、日本の将来はわからないですね。

○玄田委員 賛成で、生きるときに何が重要かというときに、まずは水と空気の議論はどこかでした方がいいのではないかと。2050年に水と空気がみんなに平等に所有されているという保証がどこにもない気がする。

随分前に、今後戦争が起こるとすれば水を求めて戦争が起こるのではないかとという議論が随分盛り上がり、今も決してそれは遠のいていないような気がします。今、一応日本で幸福度が高いと言われている福井県では、やはり皆さんどこに満足度を感じるかとすると水と空気と食だと。そういうものをここで確保するにはどうすればいいかという議論をするのはとても難しいんですけど、おっしゃることはとても賛成で、今、当たり前に行われているものがそのときにあるという保証がどこにもない。特に2050年の可能性としてはないというのが認識としては大事だと思います。

○阿部部会長 だんだんこの部会で議論することが大きくなってきましたけれども、ほかにはいかがですか。

○福嶋委員 今、所有とか契約とか、かなりプリミティブな議論が出てきていて、私も若干ついていけなくなってきているなと思うんですけど、やはり幸福という問題を考え出すと、そういう社会の基本的な概念的なインフラを根本から変えていかないと、なかなか難しいんだろうなということを感じます。

もう一つ、契約とか所有以外にもあるのが、先ほど上村先生がおっしゃった公平性という問題をどうクリアしていくかということはずごく大きいと思っております。それを突き詰めていくとすごく霞が関的な論議になるということをおっしゃっておられました。それは前回、私がプレゼンで申し上げた公共の福祉という概念は1回放り出してみませんかという提案とリンクするのかなと思っていまして、私も日々仕事をしていると、どうしてもその難しさを感じています。例えば今、私は空港の民営化という仕事をやっているんですけど、そういうものを作っていけばうまくいく空港もあれば、うまくいかない地方の赤字の空港なんかもあったりして、そういうものはどうするんだという議論が必ず出てくるんです。個別の事情に合わせていろいろ仕組みを入れていこうとすると、必ずバランスに配慮しなければいけなくなってきて、我々の仕事をやっているときもそこに手足が縛られていて、イノベーティブな仕事がしづらいなということを感じています。

そういう意味で公平性というのは多分今まではみんなが税金を払って、国に仕事を任せてやってきたところから出てきた論理だと思うんですけど、これから先ほど古市先生がおっしゃったチャーターシティとか、あるいはもっと選択できるような社会にし

ていくというときに、公平性の概念をある程度突破していかないと、どうしても幸福という、福島先生がおっしゃる第三階層の本当に個人の中にあるニーズにリーチしていくというときには、公平性の問題はある程度、度外視しないと、ここに作用する政策というのはなかなかできないのではないかと思います。

○阿部部会長 それは2050年の幸福の姿の中の前提条件として、公平というものは担保されなくてもよいということなんでしょうか。

○福嶋委員 いえ、私が思うのは、公平というのも今まで大事な概念として機能してきたと思うので、そこを部分的に崩していくのがこれから考えるべきことのかなと思っています。

○國光委員 方向性としては賛成です。でも、公平性がやはり必要な部分はあるんだと思うんです。それは例えば幸福を感じるための前提は人間が最低限健康でなければいけないとか、食の話もそうだと思うんですけども、日々のおまんまに困ってなくて、うつではなくてとか、そういうソーシャルニーズを基本的に日本国民、さらにいえば世界全員の人が公平に満たしてあげるというのは土台なのではないか。

その上で、いろんな幸福をどういうふうに変換できるかということなのかなと思いました。

○福嶋委員 一言だけ。生きていくことが重要だということは、恐らくどなたも異論はないと思うんですが、ただ、江戸時代のようなほぼ日本の中で自給自足というか、完結しているような方向を目指すのか、それともアジアや太平洋地域と連携を生み出して、国際的な連携の中での完結、最終的には地球規模の連携を生み出していくというふうに、そういうベクトルでいくのか、その両方にするのか、あるいはどれくらいの割合にするのか、それを考えないと多分、例えば国内の中で何とかしようとするのは恐らく限界だろうと思うんです。江戸時代には戻れない。

そうすると、どうやって海外の人たち、労働力にしても例えば養子をもろうということも、私はアメリカに1年間行っていたんですが、自分の子どもをつくるだけではなくて、中国から養子をもらったりするというのがごく自然にアメリカではなされているんです。でも日本ではほとんどない。それはなぜか。外国の子をもらってしまうといじめられるからという話があったり、何かつまらないそういう狭量というか、心が狭いのかなと思っています。

とにかく日本単独で完結するという道を目指すか、それとも国際的な連携の中でやるかという、そこら辺りは大きなベクトルを決めておかないと、議論が散漫になるかなと思います。

○玄田委員 関係して、公平性の議論は余りにも大きいんだけど、パトロンをつくる社会を目指すかという議論はあり得ると思う。

戦前の日本の産業とか芸術発展は地域に大パトロンがいて、パトロンが支援することで発展した社会だから、国とかではないんです。それが戦後、特に最近は非常に弱くなって

きたから、そういう大金持ちが資金を出す。例えば落語の世界で言えば長屋の大家さんがいて、熊さん、八つつあんがいて、みんな貧乏なんだけれども、何か楽しいなど。そこは大家さんとかパトロンがいなければ成り立たない社会で、そういうものを比較的ないようにして個人所有としてきた戦後社会がよかったのか、戦後に戻れと言っているわけではないけれども、もし皆さんが提起されている公平性というものがみんなが均等に扱われるのではなくて、誰かそういう大きなビックファザーみたいなものをつくった方がいい社会なのかというのは、とても議論の余地があると思います。

○阿部部会長 4時を過ぎてしまいました。まだまだこれから議論をする時間を設けていきたいと思います。次回以降は具体的に報告書を目の前にして議論していきますので、より具体的な方向性が決まった議論になるかと思っていますので、よろしくお願ひしたいと思います。

次回の部会なんですけれども、3時間開催することにいたしまして、皆様に御意向を伺いましたので、ほとんどの方より13時からの御出席が可能という御連絡をいただきましたので、13時から16時の開催ということでよろしいでしょうか。済みません、13時から御出席ができない方々には大変申し訳ありませんけれども、そのような形で進めさせていただきたいと思います。

それでは、本日はこれにて閉会にしたいと思います。ありがとうございました。